

＜ 今日の説教のポイント 創世記 41章37～57節 ＞

良いこと尽くめの41章後半？ そこから聞き取れる恵みは？

①ファラオはヨセフの何に感心したのか？

「ヨセフの言葉に感心した」「このように神の霊が宿っている人はほかにあるだろうか(37-38)とファラオは言っています。ただ将来を予言するだけではなく、その将来に備えるために語った内容にファラオは感心してヨセフに全てを委ねたのでしょう。さらに、イエス様が語られた「愚かな金持ちの例え話」(ルカによる福音書12章18節以下)を思うと、自分のことを考えて賢く蓄えたのではない点(後に、他国の人々まで救うことになった:57節)まで思い巡らしておくべきでしょう。

②良いこと尽くめと言えるか？ 遠い将来まで考えたとき。

こうして見て来ると、ここでヨセフに一気に幸せが押し寄せて来たような気がします。ヨセフの威光はエジプト中に及び(46)、のちにイスラエルの中心部族の祖となるマナセとエフライムも与えられ、ヨセフ自身が神様への感謝の声を上げています(51-52)、また、この後は兄たちを赦す出来事に向かいます。しかし、さらに将来に目をやると、ヨセフの子孫はエジプト人の奴隷となり苦しむ状態に置かれます。だからこそ、神様が彼らを救い出される出エジプトの出来事が起こるわけです。どういうことでしょうか？

③苦難の中で主にある平安を覚えて生きる 信仰の大きな恵み！

信仰が問われる時は、それによって人間に幸福が本当に訪れるか、と問われることが多いでしょう。しかし、ヨセフにしてもパウロにしても、自分がこの世的な幸いの中に置かれているかどうかを問題にしているのでしょうか？ 絶望状態に置かれた時のこれまでのヨセフに見られる信仰は、「絶望しつつ、絶望しない信仰」(関根正雄：詩編13編の信仰について)と言えるでしょう。パウロもそうです(Ⅱコリント4:11)。彼らは皆、苦難の中にあっても幸いの中にあるのです、「神様を信じて、神様と共に歩んでいる」という幸い、「主にある平安」(パウロの表現)です！ なんとという信仰によって与えられる大きな恵みでしょうか！ 感謝！